

もしにじさんじ一期生  
が異能系バトルをはじめ  
めたら

kakyo in

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんやかんやで廃校に閉じ込められたにじさんじ一期生。

わたくし達は脱出を試みるんですが、そこに立ちはだかるのはなんとあの人！

え？異能系バトル要素がない？……まあこまけえこたあいいんですよ。

起立！気をつけ！

# 目次

【美兎の章】	1
【ちひろの章】	33
【モイラの章】	48



## 【美兎の章】

1

【美兎の章】

「つまり私たち——みとさん、楓さん、えるさん、私の四人——は謎の勢力の有する謎の力によってこの謎の学校めいた廃墟に閉じ込められてしまったということですね、なるほどなるほど」

読者に優しいとてもわかりやすい解説ありがとうございますしずりん先輩。どうか急展開過ぎて誰も状況を飲み込めていないので解説したところでつて気はしますけどね、言葉で説明してもきつと誰も理解しちやいないですよ。それどころじゃないですもの。

しずりん先輩が言った通り、わたくしたちは気づくと学校めいた廃墟にいました。そんでもつて今はその中の教室の一つで作戦会議ということですよ。

……あ、はいそうですね、着の身着のままって感じで急に。ほらよくあるじゃないですかエロサイトの下の方にある漫画広告みたいな、最近よくあるデスゲーム系漫画の冒頭みたいな状況ですね。にしてもいざ自分がそういう状況になってみると面白いです

ね、怖いとか不安だとかそういう感情よりも漠然と「あー早く帰らないと配信とか学校とか大変だなー」みたいなそういう……なんて言うのかな、水戸黄門見てる感じ、クワイマックスに行くまでの気だるさって言うんですか？そっちの方が勝ってます。どうせ帰れるんでしょ？みたいな、紋所出して終わりでしょ？みたいな。まあこの辺の感覚はわたくしの個人的なものだとは思いますがね。えるちゃんなんてずっとそわそわしてますし。もしやもしや。

「みとちゃんって変なところ肝が座つとるよなあ、この状況で何食つとんねん？」

ポケットに入ってたカロリーメイトを頬張るわたくしを呆れた顔で見つめる楓ちゃん。まあそれにももう慣れましたけどね。いつもの事なんで。

「何言ってるんですか楓ちゃん、腹が空いてはなんとやらと昔から言うじゃないですか。むしろこういう時だからこそわたくしは栄養補給を怠らないようにしているわけです、むしやむしや」

「食べながら喋るのやめーや——あーもー悔しいけどみとちゃん見てたら逆になんか落ち着いてきた、とりあえずこれからどうするかみんなまで話し合った方がええんちゃうかな？な？」

そう言ってみんなをまとめに入る楓ちゃん。さすがですね。さすがです。みなさんも『さすがえ』ってコメントしているんですよ？あ、米稼ぎじゃないです違います。わ

たくしは純粋に楓ちゃんへの敬意をです、みなさんと共有したいと……。

「あの、楓さん。とりあえず各自の持ち物を確認するのはどうでしょう？ みとさんみたいに食料なんかがあればこれから必要になるかもしれないですし……」

「あーそれええな——あ、ほら、えるちゃんもぼけつとしとらんと、こつちおいで」「え、あ、べ、別に、える全然大丈夫だよ？……あーでも、でろーんちゃんが怖いって言うならまあ傍にいてあげてもいいかなーって」

「うるさい、はよ来い」

「はい……」

「こういう時までなにイキつとんねん、このアホエルフ。……みんな怖いのは一緒やねんから、えるちゃんだけ無理せんでもええからな？」

「……あ、ありがとう、ごさいます」

かえるてえてえ。えるちゃん耳真つ赤ですよ。ここぞとばかりに腕組んでるし、これは完全に落ちたな。

「かえるてえてえのは分かりましたからみとさんも早く所持品見せてください。とりあえず長丁場になるかもしれないのでカロリーメイト、大事に食べてくださいね？」

さーせん。

\*\*\*\*\*

「これで全部ですか……。なんとというか……。これ、サバイバル無理ですよ〜?」

サバイバルのプロであるしずりん先輩が言うのなら間違いはないのでしようが、わたくしが素人目に見てもそれは悲惨なものでした。

提出されたのはわたくしのカロリーメイト、楓ちゃんのハリセン、えるちゃんのりんご、しずりん先輩に至っては手ぶらとの事です。

着の身着のままとは言いましたが本当に身につけているものしかこちらに飛ばされず、スマホ（圏外）や財布（使い道がない）、筆記用具（一応わたくし達JKですからね?）以外はみなさんほとんどなにも持っていない状態です。実用性のあるカロリーメイトを持っていたわたくしはまだマシな部類と言えますね。ハリセンで樋口お前……。もうちよつとなにかなかつたんですか?というか日常的にハリセン持ち歩いてる女子高生ってどうなんですか? ツツコミとしての意識高すぎませんか?

べしん。

「いったあ! なにすんですかもう!」

「みとちゃんあれやろ、今絶対ハリセン馬鹿にしてたやろ」

「え……。いやいやいや、そそそそんなわけないじゃないですか! ねえみなさん?!」

「周りを巻き込むな、あと嘘下手くそか」



「……まあハリセンは私もどうかとは思いますが、経済弱者なので黙ってまーす」  
「りん先輩!？」

ほら見る樋口、そういうところやぞ。

「……ふふつ、あはははははは」

「えるちゃんもそんな笑わんでも……あーもー」

「ううん、える元気出たんだ。ありがとうだよ」

そう言いながら楓ちゃんの腕を握り直すえるちゃん可愛い。もう可愛い以外の形容がし難いレベルですよねあのエルフ。可愛い。

「そうだよね——ごめんね。落ち込んでてもなにも始まらないもんね。みんながいればどうにかなる、えるも頑張らないとね」

「その意気やでえるちゃん、みんなで頑張っていこうな?」

あれ? 楓ちゃんえるちゃんに対してだけ優しくくないですか? わたくしの時と反応違いますか? ……あーまあ、確かに。そろそろわたくしと楓ちゃん熟年夫婦みたいになつてきましたもんね。つて誰がやねん!

「あ、ちよつとみとさん静かにしてください」

「え、あ、すみませんしずりん先輩……」

いやわたくし声出してたわけじゃないんですよ? 冷静に考えてください皆さん。怖

くないですか、こんなに一人言ぶつぶつ言つてたら？これ心の声ですからね？しずりん先輩はわたくしの心の声聞こえてるんですかね？

「み、と、さ、ん？」

あ、はい。さーせん。

しずりんパイセンがマジな顔つきで睨んでくるので少し黙りますね。これ完全に聞こえてんなあ……。

「どうしたん、りん先輩？　なんかあつたん？」

「……足音がします。外の廊下から」

ひそひそ声で話すりん先輩と息を呑むえるちゃん。この二人わりと対象的ですな。

「……うん。一つ、二つ……三つかな？　恐らく三つですな。少なくとも三人以上はいないと思います。ゆっくりこちらに向かって来ますね……聞こえませんか？」

「……。あ、ほんまや。わたしもギリ聞こえた。よくこんな分かるなあ、りん先輩」

「伊達にFPSガチ勢やってないってことです」

「ほんまかいな——で、どうすんの？　りん先輩のその感じ、あんまりウエルカムってことでもないんやろ？」

「いえ、ウエルカムかどうか、その辺の判断はつきませんが——とりあえずこれをやり過ぎさせた場合、こちらから一方的に接触することが出来ます。まあヤバそうなら接触

しないという判断も出来ますから、ここは隠れといて損がないかと」

「OK、わかった」

なんか一気にシリアス展開ですね。にしてもこういう時のしずりん先輩の頼もしさが半端ないです。いえすまいろーどって感じで——あ、足音わたくしにも聞こえるくらいになりました。けっこう近い。急いだから良さげです。

「そういうことやから、みんな。一旦ここは隠れとこ」

「分かりました、リアル青鬼ですね。わたくしそういうのめっぼう得意なんでだいじよ——」

「聞いてない聞いてない」

「え、え? どうしよう、隠れるってどこに? あの……」

「えるちゃんはとりあえず用具入れに入るとき。背高いしな、一番安心やろ?」

「あ、う、うん、わかった。用具入れね、わかった」

「出るタイミング合わせたいので私が一番最初に出ますね。皆さんはその後に続いてください……ではご武運を」

言うや否や薄暗い教室の闇に隠れるしずりん先輩。忍びかなにかですかあなたは。続いてわたわたと用具入れに入るえるちゃんと、よっこらせつと立ち上がった楓ちゃんは教卓の下に。

さてと——わたくしも隠れなければ。

……隠すのなら慣れてるんですけどね。いや、慣れたくもないですけどね？

2

さてさて、分かりますかみなさん。わたくしがどこに隠れているのか。まあ勘のいいリスナーさんならきつと分かつてらっしゃると思われませんが——はい、カーテンの裏です。ドアが開いたら真ん前。しかも正直な話、一番防御力ないですよねカーテンの裏。なんかヤバめなお方が舞い込んで来た場合、わたくしなす術もなくフルボッコなのですが。いやだつてね、違うんですよ。もうそのくらいしか隠れるところがなかつたつというか、皆さんのいい場所取りすぎなんですよ。まあえるちゃんには仕方ないとしてね？えるちゃん怖がりですから。おい樋口楓！ほんとそういうとこやぞ！

「……ごめんなさいみとさん、集中したいのもう少し静かにしてもらえますか」

え？え？どこからともなくしずりん先輩のひそひそ声がしました。カーテンから頭だけを出して辺りを見回すも、それらしい人影はありません。なんなんですかあの人。ほんとに忍んでるじゃないですか。

「上です上——あ、そうだ、ちよつと一旦降りますね」

しゆたつと天井から降つてくるしずりん先輩。入口付近の天井に張り付くなんて

やつぱり忍びじゃねえか。なんなんですかこの無駄なハイスペック。

「そんな私だけ特別ハイスペックつてことじゃないんですよ？ 日夜腹筋を鍛えてる凜f a mなら出来て当然のことです」

凜f a mやべーな——つてだから心の声に入つてこないでくださいって！ え、なんなんですかさつきから？ しずりん先輩は超能力者かなんかなんですか？

「いや、超能力者つてわけじゃないんですけど——みとさんの顔を見てたら何となく分かるつていうか、きつとこんなこと考えてるんじゃないかな——つていうのが勝手に脳内変換されてしまい——まあそのくらいなんですけどね？」

「いやなんかむしろそっちの方が凄いというか、わたくしは怖い」

「あははは、すみません」

まあそれはいいとして、と区切るしずりん先輩。全然良くないのだが……。

「みとさん、ふと思つたんですけど——というか十中八九なにかしらあるとは思いますが——みとさん、あの、言いにくいんですけど……普段とちよつと違いますよね？」

「え？……いやまあ、わたくしはよく不当に頭がおかしいやつ扱いは受けますけれど、そうじゃなくてですよ？ 普段と違うつていうと……うーん？」

しずりん先輩の質問について考えようとしたが、そもそも『普段と違う』つてい

うのが漠然としすぎていてなにを考えればいいのかやら。まあこんな状況ですから自分が気づかないところで普段と違う行動を取ってる可能性はあります。でもそれにしたって楓ちゃんにツッコまれたくらいの、我ながらマイペースな行動を取っていた自覚はありますし、ふーむ……。

そんなことを考えていると「なるほど、なるほど……」と一人納得しているしずりん先輩。

「わかりました。みとさんが無自覚なのか、私の勘違いなのか——うん、こんな状況なので色々思うことはあるかもしれませんがね。みとさんだからと私は思い違いをしていたかもしれません。みとさんだって女の子ですからね」

「なんだか『みとさんだって』のニュアンスに若干の引っかかりを覚えるのですが……。ほんとなんだと思われてるんですかわたくし……。」

「私がしつかりしないと」と頬を叩くと、しずりん先輩は続けました。

「みとさん、あなた達は私が全力で守りますから、誰一人欠けることなく帰りましょう。だから安心してくださいね？……。……。なんて、言ってみたりして」

ちよつと照れ笑いをするとりん先輩はまたすつと闇に消えました。その照れ笑いはわたくしの顔を真っ赤にするくらいの破壊力があつたのでしずりん先輩が造作もなく闇に消える事実については考えないこととします。

——そして足音は教室の前で止まりました。

\*\*\*\*\*

わたくしはカーテンを頭から被っていたのと、その、流石のわたくしといつても手が震えるくらいには怖かったので、その会話はあまり耳には入ってきませんでした。ただしずりん先輩の声がしていたのと廊下から一人誰かが入ってきたのはわかりました。カーテンの薄い生地越しにうつすらと教室の闇が写ります。人影が二人。続いてガラガラと乱暴にドアが開くと同時——

——絶え間ない銃声が鳴り響きました。

「なにやってんの、はじめおにーちゃん？ 見つけ次第殺せって言ったよね？ ちひろのことばわかる？」

「あ、ち、違うんだよちーちゃん。今しずりに背中を取られてて、それで……」

「ふーん、その手に持つてるAKは飾りなのかな？ 刺し違えてもいいからやれって言つたよね？ 特にりんおねーちゃんなんて《異能》の存在に気づいたら厄介だよね？ ね？ わかんないかな？ そのくらい頭回らない？」

「ご、ごめん。ごめんね、ちーちゃん」

「ごめんじゃねんだよ！」





「みとちゃん……みとちゃん！しつかりせ！みとちゃん！」

「あ……楓ちゃん？楓ちゃん……あの、銃で、打たれて、せんぱいが……」

「わかつとる、わかつとるから……一回落ち着き、震えてんで、手」

「え？」

言われて気がつきました。わたくしの手は楓ちゃんの服を掴んだままぶるぶると震えています。そこでわたくしは「あ、わたくしは怖かったんだな」ということがわかりました。自分のことなのにおかしいですよ？でも脳が状況を把握してないんです。

……把握したくないのかもしれませんが。

「楓ちゃん……ちよつとだけいいですか？」

「ん？ええよ？なに？」

「あの、ちよつとだけ、落ち着くまで……あの」

「わかった」

二つ返事で私の頭を抱く楓ちゃん。なんなの、もう、なんなのよ。イケメンかよ。あーもう。

……悪いけどみなさんちよつと目をつぶっててください。

絶対開けんなよ！絶対だからな！

\*\*\*

「みとちゃん鼻水鼻水」

「あ……ごめんなさい……あれ？ ティツシユ、ティツシユが……あれ？」

「ほんとみとちゃんやんなあ——まあしやない、ほらハンカチ」

「え、でも、え？ 鼻水ですよ？」

「しやあないやろー、そんな顔して歩かれへんて」

「うう……ありがとう……」

「今度クリーニングして返してな？ のりぴっちーかけてな？」

「……うん」

「……調子狂うわあ、もう。ほら行くで——えるちゃん探さんと」

「あ、待つて……つて、えるちゃん？ え？」

3

「あの後すぐ、わたしが用具入れを空けた時には誰もおらんかったのよ。近くの教室も見たけど人の気配せんし、おかしいな——ってなつて。あ、そんでみとちゃんを思い出して——」

「え？ わたくしそこ？ そこで思い出すんですか？」

さっきの感動を返せよ樋口楓！おい！

ていうか周りの教室まで見て回るってかなり優先順位低くないですか？ねえ？

「あー、だってえるちゃん一人だと心配なんやもんあの子」

あーまあ確かに。それは分からなくはないですね。庇護欲が掻き立てられるといいますか。

「それに引き換えみとちゃんって一人でほっぽっておいても大丈夫な感あるやん？」

あーまあ……確かに。残念ながら当然の結果ということですね。

「ふむ。で、えるちゃんどこから探します？——と言っても地図もなにもないんで、どこ探せるのかすらよくわからないんですけど」

「まあそれなあ——あ、でも一つだけ確実なところがあるわ」

「お、なんです？トイレとかですか？さすがにトイレはありますよね、学校みたいです。案外えるちゃん御手洗に行っただけかもしれないよ？」

「ちやうわ、仮にえるちゃんがトイレしに行ったとして長すぎやし——って思っただけどえるちゃんなら帰り道迷いかねんわ……」

「うっ、有り得ますね……」

そんなやり取りをしつつわたくし達は廊下と階段を歩き来しひたすら下へ下へと歩いていました。なにはともあれまずは出口の確認をしようということですね。この廃

墟、腐つても学校なのできつと玄関くらいあるだろうと。色々考えさせられることはありますが基本を怠ってはいけません。

\*\*\*\*\*

「……楓ちゃん？」

「ん？……あ、ああ、なに？」

なにやら楓ちゃんが考え込んでいる風だったので声をかけました——というのは半分建前で、一見こういう時にはもってこいに思える下へ下へと降りていくだけの単調な作業ですが、わたくし達の気持ちまで下がっていくようでこの沈黙がちよつと耐えられなかったというか、まあテンション上げろっていう方が無理なんですれど。……それにわたくしもずつと考えてることがあります。おそらく楓ちゃんが考えているのも同じことでしょう。

「さっきのあれ……ちーちゃんとはじめさんでしたよね？」

しばらくこつこつと靴音だけが廊下に響いていました。ある意味その沈黙こそが一番の肯定であるとも取れます。

「なんか……あんねんやろな……。あいつなりに、なんかが」

まあそう考えるしかありませんし、そう考えたくなるでしょうね、楓ちゃんですから。

でも――

「でもあの子は――しずりん先輩を殺しました。それは紛れもない事実で――

――

「わかつとる！わかつとるわ、そんなこと！」

靴音が止まりました。私の方を振り返った楓ちゃんは目に涙を貯めていました。

「でもあいつは、確かに口は悪いかもしらんけどな、どんな理由があろうと平気でこんなことするやつじゃない。それはみとちゃんも分かるやろ？」

「ええ、わかります。でもわたくしは……しずりん先輩を殺したちーちゃんを……許せない」

最後に聞いていたあの声が、あの顔が、わたくしには焼き付いていました。

――とても皆さんにはお見せできなかった部分の話をしましょうか。凜 f a m の皆さん、居たらごめんなさい。

しずりん先輩の死体を目にした時、はじめはそれがなんなのか分かりませんでした。というのも身体の至る所が銃弾によつて弾け飛んでいたので人間の形をしていなかったんです。でも先輩の顔であった部分を見た時にしずりん先輩とわたくしの目が合ったんです――ええ、合つてしまいました。ある意味事故ですね。その瞬間とてつもない気持ち悪さがあつて、吐き気がしました。

結局何が言いたいのかという事ですぬ——

「しずりん先輩にはああいう死に方をして欲しくなかったんですよ」

きつとこういうこと。悲しいとか悔しいとかよりも、もつとやり切れない気持ちがありました。ちよつと違うんですけど、最終回だけ酷い作画のアニメを見せられた感じと  
思っていただければ皆さんも想像が……あー、ちよつとこれは程遠すぎますぬ。

なんでも出来る凄いい先輩。いつも冷静で、しつかり者で、頭のいい素敵な先輩。そんなしずりん先輩をああいう姿に汚されたのが、わたくしは許せない。

「きつとなにかしら理由はありますよ、わたくしだってわかってます。でもねえ、それで許せるかって言われたらわたくしは……ごめんなさい、ちよつと深呼吸します」

「……。そっか、みとちゃん優しいもんな」

その『優しい』がなにを意味するのか、少し胸に引っかかりました。わたくしなんかよりも楓ちゃんの方がどれだけ優しいか、そんなことは自分でもわかってるつもりです。

再び靴音が廊下に響きました。

またしばらく気まずい時間が通り過ぎていきます。

\*\*\*\*\*

最後の階段を降りるとわたくし達の探していた玄関がありました。ただまあ皆さんお察しの通りお通夜なので、わたくしも楓ちゃんもきやうつきやうふをするわけでもなく事務的に確認をしていきます。そしてわかったことは、まず結論から言わせてもらえば出れないということですね。まあ薄々感じてはいましたよね？これで出れたら逆に廃墟まで連れてきた意味なくね？つてなりますもんね。

「ああもう——このクソツタレえ!!」

楓ちゃんが教室の椅子を玄関のガラス戸に叩きつけていますが傷一つつきません。この辺も漫画なんかでよく見るやつですが、実際にやられると絶望的なものですね。あれだけ楓ちゃんがガツガツと叩きつけてもビクともしませんし……つて楓ちゃん!?

「楓ちゃん! 待つて! ちよつと待つて!」

「くそ! この! くそがあ!」

わたくしが呼んでも振り向きません。

もう……どつちが世話が焼けるんでしょうかね、まったく。まあ今回は……わたくしも悪いか。思えば楓ちゃんに頼りきりになっていましたし……うん。

わたくしは椅子を振り上げた楓ちゃんの腕を抑えました。

「は? なに? 離して? 今確認中やから。みとちゃんもはよ出たいやろこんなところ、だから——」

「——楓ちゃん、手見せて」

「いいから、そんなん。どうでもええねん。構わんといてって」

「いいから出しなさい」

力づくで椅子をぶんどります。楓ちゃんの手は豆が潰れて血でべつとりとしています。楓ちゃんは顔を背けて、まるでいたずらが見つかつた悪ガキのようにバツが悪そうにしています。

「……ごめん、なんか、むしゃくしゃして」

「いいんですよ、そんなことわかつてます。なにも怒つてませんし咎めたりしません。わたくし、こう見えても楓ちゃんと付き合ひ長いんですよ？知つてました？」

「ははは……あー、かつこ悪いなあもう。自分がいやんなるわ」

「大丈夫、大丈夫ですよ」

そう言つてわたくしは精一杯背伸びをします——仕方ないじゃないですかこればかりは！確かに不格好ですけど！——そして楓ちゃんの頭をそつと抱きしめました。これでおあいこですからね。さあ泣きなさい樋口楓。わたくしが全部受け止めてあげますから。

「みとちゃん……」

「なんですか？わたくしはいつでもばつちこい、ですよ？」



「みとちゃん胸って思ったよりぺったんこやんな……」

「なっ……」

「ありがとうな……」

「……。……ほんとずるい女ですね」

どうですか皆さん。これが正妻の包容力ですよ——なんつって。楓ちゃんの安らかな顔が見ただけでわたくしの心も浄化されそうな勢いです。……まあそうですね、わたくしが浄化されたら何も残らないというのはなかなかの得ています。

——と、そこでカツン、カツンとなにかの金属音が近づいて来てることに気がつきました。残念ですね皆さん、幸せなかえみとタイム終了のお知らせですよ？

## 4

「楓ちゃん聞こえています……？」と楓ちゃんに耳打ちをすると「みとちゃんの心拍がうるさくて聞こえてない」なんて返してきやがったので樋口楓はここに捨てていきましよう。

「待つて待つて、冗談やつて。置いてかないで」

しがみつく楓ちゃんをずるずると引きずりながら下駄箱の裏へと隠れます。ここはしずりん先輩に習いましょうという魂胆です。

「誰やろう?」

「……ちーちゃん、ならもつと静かに近づいて来てますよね?」

「あ、うーん、あのガキ、案外大雑把だからどうかかな?——でもこの音、少なくともさつきはせんかつたよな?」

「そうですね……じゃあ違う誰かがここに?」

そんな話をしている間にその人は現れました。廊下に響いていた金属音——あれの正体は巨大なつるはしのようなです。そこに立っていたのは渋谷ハジメさん——  
「いえ、眼鏡がありませんのでオワリさん、でしょうか?」

「なあ? いるんだろ? 出てこいよ。さつきと終わらせてやるよ」

\*\*\*

「なにが『違う誰かがここに』やねん、既視感バリバリやわ」

「いやだつてほら、ちーちゃんじゃなかったじゃないですか。わたくし間違つてないですからね?」

下駄箱から頭を出して覗いていたわたくしの上に頭を乗せる楓ちゃん。

「んで、どうする? なんか気づかれてるみたいやけど」

「まあその……あれだけうるさくしてれば……ねえ?」

「あー……確かに」

わたくし楓ちゃんの脳筋ぶりにはもう慣れていると思っただけですけど改めて見るとため息が出ますね。ましてこの状況だと。まあそれを止めないわたくしもどうなんだって気はしますけど。

「とりあえず様子を見ましよう。しずりん先輩も言っていましたけど、こちらから仕掛けられる状況を作って、それから——」

「おい、シカトか？お前らも……お前らもオレをコケにしてんのか！おい！」

ガリンとつるはしが玄関の床を抉りました。それはまるでケーキをフォークでつついたかのように滑らかに刺さっていきます。抉り返されたコンクリートの塊がハジメさんの後ろに、あ……オワリさん？結局これどつちで呼ぶのが正しいんですかね？……あー、オワリさんでいいんですね。わかりました。統一しましょう、彼はオワリさんです。皆さんいいですね？オワリさんですよ？

「みとちゃん？みとちゃんはハジメさんの不意をついてくれへん？わたしがハジメさんの気を逸らすから、その間に」

「え？楓ちゃんさっきのつるはし見ました？ちよつと無謀ですよそれは」

「頼んだわ————おい、ハジメさん！」

「あ、楓ちゃん待つ……」

この脳筋女！わたくしが止めるまもなく楓ちゃんはオワリさんの前に出ていきました。さつきまでの様子を見てもこの人がいつもものオワリさんじゃないことくらいわかるでしょうに。あとハジメさんって呼ぶなややこしい。

「でろーん、でろーんじゃないか。くくつ、そうだよなあ！でろーんは皆の人気者だもんなあ！オレのことなんて見下して当然だよなあ！」

「ちよつとハジメさん、何言つて……とりあえず落ち着こう？な？」

「は？オレは至つて冷静だよ、とつても落ち着いてるし、今最高に気分がハイなんだよ——だからさあ！」

オワリさんがつるはしを振り回すと周りのものが次々に挟れて飛び散りました。その残骸が楓ちゃんの方にも容赦なく降り注ぎ、後ずさるようになつて楓ちゃんは尻もちをついています。

「だから——早く死んでくれよお！」

「ハジメさん？どうしちゃつたのさハジメさん！ちーちゃんといいハジメさんといいみんなおかしいわ！なんでこんなことすんの？ねえ——」

「ちーちゃんの話をするなあ！」

「楓ちゃん危ない！」

八つ当たりをするかのように振られたつるはしは楓ちゃんの頭スレスレを通り隣の

下駄箱を粉々に抉り抜きました。

引きつった顔で浅く息をする楓ちゃんはこちらに一瞬目をやって小さな声で「出てもうてるやん」と呟いています——あ、出てもうてるやんわたくし。ですがそんなわたくしに目も向けないでオワリさんは頭を掻きむしっていました。

「勇気ちひろお！あいつが！あいつがいるせいで！あいつの《異能》さえなければ！くそお！」

「い、《異能》……？なんなん？それ？」

楓ちゃんが目で合図しています。はよ隠れる。OK、わかりました。ここでわたくしが出ていったところでどうにもならなさそうですし、楓ちゃんの作戦に乗りましょう。人間引き際が大事って言いますからね。

「おお？でろーんは《異能》についてなにも知らないのかい？あのでろーんがそんなことも知らないのかい？あつはははははは！」

「……知らんもんは知らんねん……ハジメさんは知つとんの？」

「知ってるもなにも、でろーん！今君が目にしてるのがオレの《異能》だよ！このつるはしこそがオレの《異能》——

《Getting Over It》だ！」

「へええ、大層な名前やんか——でもそれってただのつるはしやろ？《異能》、《異

能》って言うところけど実際なにが凄いいん？」

「は？はああああ？君さあ、見てたよね？オレの《Getting Over It》が！この床を！この下駄箱を！めっちゃめっちゃにしているとこ！見てたよねえ！」

「……あ、ああうん、確かに半端ないパワーやったわ……それがそのつるはしの力なんやな？」

「……ああなるほど、君はまだこいつの本当の力を見てなかったね」

\*\*\*\*\*

もうさすが楓ちゃんとしか言えませぬね。さすかえ。のらりくらりと時間を稼ぎつつ、情報まで聞き出していますし。《異能》って言っていましたか？なんなんでしょうとても厨二心をくすぐるワードですが、この流れとシチュエーション、それに《異能》とくればもうそういうことですよ？——わたくし達も覚醒すれば《異能》が使えるってことなんじゃないですか？ね？

物音をたてないようにわたくしは一番端の、一番オワリさん達から遠い下駄箱へと這っていききました。その下駄箱からぐるっと回り込んでいけばオワリさんの背後を取れるって寸法で——え？背後を取った後ですか？……。……。まあそれは、あの、ほら。口にカロリーメイトでもぶち込んだけばいいんですよ。

「……ああなるほど、君はまだこいつの本当の力を見てなかったね」

オワリさんへと近づこうとしたその時、オワリさんはつるはしを聖火のように掲げました——その刹那、周囲の瓦礫がするはしに集まっていきました。

ゴツンと鈍い音がしたと思ったら倒れていました。いつてえ！マジで痛い！これたんこぶ出来るやつですよ！

吸い寄せられていく瓦礫の一つがわたくしの頭にぶつかつた様です。大きな破片ではなかったのが不幸中の幸いでしたね。つってもすぐく痛いんですけど。

「これが《Getting Over It》の真の能力！こいつは一度触れたものを再び引き寄せることが出来るのさあ！……ん？その顔はまだどういふことかよく分かってない顔だねえでろーん」

楓ちゃんへとゆっくり近づくとオワリさんはつるはしで楓ちゃんの右胸をつついて

——はあ？右胸を、胸を、つついてえ？！

「ここを抉り取る、そしてまた引き寄せる。さらに抉り取る、そしてまた引き寄せる。さすがにもう分かったら？ゆっくりその身体がズタズタになっていくのを楽しむがいいさあ……あつはははははは」

あの皆さん事態は急をします。緊急事態です。わたくし達の楓ちゃんがオワリさんに凌辱されようとしてるんです。わかりますね？ふざけてる場合じゃありません——

——って言ってる傍からもう！次やったら即NGにするからな！———どうにかする手段、なにかないですか？なんでもいいです、なんでもいいので———今『ん？』って打ってるやつ！ほんとお願い！早くしないと楓ちゃんが！

———え？委員長も《異能》を使えばいいじゃんって？

\*\*\*\*\*

「……はっ、大したことないやんか」

「ああん？今なんて言ったよ？おい？」

「そんなんだしたことないなあって言ったんやボケえ！」

楓ちゃんが叫ぶと同時にオワリさんが楓ちゃんを蹴りあげました。嘘みたいに綺麗な弧を描いて楓ちゃんは地面へと落ちます。

もう少し待ってください、もう少しで把握しますから、もう少しなので———。

「でろーん？君がそこまで馬鹿だったとは思わなかったよ……オレをコケにして、タダで済むと思うなよ？」

「んぐっ……なはは、だつてな？ほんまにしようもないんやもんそれ……。そんな格好つけといてやるのが女子高生一人をなぶり殺すだけやる？……はあー、アホくさ！」

「……もういい、死ね」



——ちよおつとまったああああああああああ!!

「みとちゃん、思つきし正面から出てきてどうすんねん」

オワリさんとの間に滑り込んだわたくしを見て苦笑する楓ちゃん。

だって時間がなかったんですもん。それに……その……。

「——は？ 《異能》の使い方がわかった!？」

「しっ、声が大きい」

「いや、つまりみとちゃんが《異能》を使ってハジメさんをぶん殴ってくれるっちゅうことやろ？ もうそんなこそそすることもないやん？」

「いやだからね？ その……」

わたくしがそれを出来たらもつと早く駆けつけてますという話なわけで。ごめんなさい、せつかく皆さんが教えて下さったのに。わたくしにはどうやっても変化がありませんでした。

——しよせんわたくしはクソザコ委員長だつていうのを忘れていたんです。ちよつと調子に乗っていました。みなさんの力を借りないとなにも出来ないくせにでしやばつた真似をして。その報いがこれなんでしょうね。

「だからせめて楓ちゃんと一緒に、その……盾になるつもりで来ました」

「このアホ、わたしがそんなんで喜ぶと思つたんか！ わたしはもつとみんなと楽しく遊

んでいたい、死ぬのなんてまっぴらごめんやわ！」

「——あ、それですそれ！楓ちゃん！」

皆さんの数あるコメントの中、『《異能》の覚醒条件』について書き込んでくださった方がいましたよね？ありがとうございます。なんでそんなこと知ってるんだよってのは今は不問にしといてあげましょう。とりあえずその情報はデマではなかったみたいです。だって現に『覚悟を決めた』楓ちゃんの右手が赤く光っているんですから。おまえらたまにはやるじゃん！

「うわ、なんやこれ」

「だから《異能》ですよ《異能》！それが楓ちゃん的能力なんですよきつとー！」

「あー、右手が赤く光るのが？え？どうすんのこれ？なんか意味あんの？光ってる以外には特になんもないし——あ、ちよつと生暖かいなこの光」

「……え？楓ちゃんの《異能》って生暖かく光る右手ってことですか？あのそれ、《異能》使えてないわたくしよりか使えないやつじゃ……」

「はあ?!そもそもスタートラインにすら立ってないみとちゃんには言われたくありません——」

「いやだつてほら、わたくしは将来性ありますから。楓ちゃんは生暖かく光る右手止まりですけどわたくしの場合は生暖かく光る右手以上の《異能》を持つてる可能性があり

ますからね？楓ちゃんは生暖かく光る右手ですけど……」

「生暖かく光る右手つて連呼すな！——つてそんなん言ってる場合じゃ」

「——あのさあ、きみらさあ」

——あ、忘れてました。いや完全に忘れてた訳では無いんですけどね、こんな状況ですし。わたくしオワリさんの真ん前ですからね？——あのですね、どこか普段のノリが抜けていないといえますか、あの感じ安心するんですよねえ。頭の片隅でどうか、このまま死ぬならまあアリかなつて思つちやつてたわけで——あー楓ちゃんにははた迷惑な話ですねこれ。

「きみらはさあ、本当にさあ、オレのことどれだけ見下せば気が済むんだい？なあ？このもう死ぬかもしれないつて時でさえ天下の委員長様とでろーん様はオレのことを見てくれないのかい？なあ？——なあおい！」

「違うんですよオワリさんそういうことじゃ——」

つるはしがわたくしの頭を打ちました。きいんと鈍い金属音。衝撃と痛み。飛んでいく身体。痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

受け身をとることも出来ずにわたくしの身体は転がっていききました。為すがままのこの身体と混濁する意識は頭の痛みだけで繋がっています。

ぼんやりとだけ声が聞こえました。

わたくしの名前を呼ぶ声。何度も何度も呼ぶ声。その声に身を委ねると頭の痛みが  
少しだけ楽になる気がして。わたくしはそつと意識を手放しました。

## 【ちひろの章】

1

## 【ちひろの章】

は？気がつくとよくわかんない場所にいたのだが……。

まあでもちひろはあまり驚きません。あいつらはヤクザだとかなんだとか言うけれど腐つてもちひろは魔法少女だからね、そういうみよーちくりんなことが起きたところでぜんっぜん驚かない。「あーよくありますよねーあははうふふー」って感じ。まあこういうの冷たいって言う人もいるけど、ちひろは『りありすと』な魔法少女だから楓おねーちゃんみたいなりアクション芸人さんとは違うのだ。今回もさっさと終わらせてちやつちやと帰ろう……まずは状況把握でもしましよーか。

よいしょつと立ち上がってスカートについた埃を払った。「そうじくらしいしろよなーったくー」という一人言が漏れてしまったけれど、これは仕方ないのだ。『しよくぎよーびよー』ってやつだから。

……どっかに花ちちゃんでも落ちてないかなー。

\*\*\*

「で、お散歩してみたはいいものの、どこもかしこも教室、教室、教室。みんなおんなじでつまんねーな……」

なんの情報も得られないままちひろは廊下を歩いていました。携帯は圏外だし外も薄暗くて見覚えがない。強いて分かったことといえばここが学校のような場所だったことと、窓ガラスをべしべしぶんなぐつても割れないということ。

——ちひろ的にはだいたい見当がついていました。どうせ花咲みたいな『しようわる』がきつとまたなにかやらかしたんだ。あいづらならこんなことでもやりかねない。まったくもう、まったく。やり過ぎなんだよなあもう。なにが楽しくてこんなことしてるんだか……帰ったらシメてやんないとな。

「あーもーきりがねーなあこれ」

廊下の端まで来ると上下に伸びる階段がありました。けれどちひろの足はもうくつたくたでこれ以上歩きたくない、というかあと何往復すればええねん。

——みんななんか勘違いしてるけどちひろ幼女やからな？

「……ちかたない、あれつかおうあれ」

あんまり使いたくないのだから。疲れるし。なんか調子が狂うというか、ちひろの『あいだんていていー』が損なわれる気がする……。

まあ今回は誰も見てないし『きんきゅーじたい』だから仕方ない。ちひろは床に『まほーじん』を書いて魔術を起動させます。毎回思うのだけこの『まほーじん』を書く工程がめんどくせーんだよ、もつと簡単に魔法使わせてくれよって思います。

「とりあえず一番上かな？ 屋上まで出れば最悪だれかが見つけてくれるだろうし——それに玄関なんて行ってもどうせ開かないだろうしな」

……。……。あれ？

足元の『まほーじん』は光ってるのにいつもみたいに反応がありません。いつもはもつとすぐ来るはずなのに……。なんだこれ？ クソ回線か？ ん？

そう思いながら『まほーじん』をがしがし踏みつけていたらゆっくりと反応が返ってきました。もうなんなんだ！ 早く帰りたいのだが！ こんなところでまで回線で困りたくないのだが！！

——ぼんつと腑抜けた音と共に『わたし』の視界が高くなりました。魔術を使つたあと特有の怠さがあり、一度んーつと伸びをします。軽い柔軟をしながら大きく伸びた手足の感覚を確かめて、最後に制服を整えました。

「よし、これでいいかな」

どこからどう見ても変身は完璧でした。あのちんちくりんな幼女姿とは似ても似つかない素敵な大人の姿です。鏡がないのが惜しいくらいですよ。高校生となつたわた

しは階段を上へ上へと登りました。

あの小さな身体では無限に広がっているかに思えた校舎もこの身体にとつてはなんてことなく、屋上には呆気なくたどり着きました。なんだかんだ言っても所詮は少女、体力的にも精神的にも大したことはないんだよね。あんなのただ周りの方達の優しさに甘えていきがってるだけ。それすら自覚してないなんて、なんと愚かなんだろうね。わたしとしてはあの傍若無人な振る舞いはもう少しどうにかしてほしいところ。ハジメさんや楓さんには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

——あれ？

なんかおかしくない？おかしい……です。魔法陣の起動にもラグがあつたし、ちよつと調子が悪いかもしれません。こんな陰気なところに閉じ込められて気が滅入ってるのかな？

2

屋上はこざつぱりと開けていました。今どき飛び降り防止のフェンスもない有様です。その代わりといつてはなんです、そこにはぽつんと一枚の大きな鏡が置いてありました。木製のフレームの着いた簡素な姿見はその場でとてつもない存在感を示しています。まあ場違いですよ、屋上に姿見って。違和感があつて当然だと思えます。



——なんてね、わたしは無いんだけどね、違和感。

そりやそうだよ、ここはわたしのお庭ですよ？どこもかしこも見慣れた風景で、目をつぶつても歩けるくらいだよ？

あーもうやつと出れたー、きゆうくつだったー！

もうさ、ずうつつとあの幼女にくつついてないといけなかったからお姉さん疲れちゃったよほんと。これでやつとゲームが始められるよー、いやーよかったー。

わたしは魔術を起動させて空中にモニターを呼び出しました——あ、『魔法陣』なんて必要無いんですよ。わたし高校生なので。あんな『身体強化』と『物質転移』くらいしか使えない女兒とは一緒にしないでよね？

モニターには他の一期生の様子が映し出されています。まあ呼び出されてすぐだから皆さん気持ちよさそうに眠ってるね。

さてさて、どうやって遊ぼうかなー。どこに混ざろうかなー。あはは、想像しただけでわくわくしてきたよ。この日のためにわたしは沢山準備してきたんだからさ、今日は少しくらいわがままでもいいよね、うん。

——あはは、誰から殺そうかな？

「は？あああああああ？」

え？な、なに言ってるの？どういうこと？え？

わたし——ちひろは、ちひろはなに言つてんの？頭の中がめっちゃくちゃで、まるでちひろがもう一人いるみたいなの、頭の中で勝手に声が響いて、身体が動いて、なにこれ？どうなつてんだよ？

「……つはあ。まつたくさあ、空気の読めない幼女だよ。もう少し黙つてられないのかな？つていうかよく出てこれたね？結構しつかりと切り離れたつもりなんだけどな」  
だからなに言つてんだよかわかんねーんだよ！なんなんだよお前！ちひろになにしたんだよ！早く元に戻せよ！

「あーつたくうるさいなあ、騒げばどうにかなると思つて。わたしはちひろだよ、ちひろ。なにをしたもかになしたもないよ、あなたはわたし、わたしはあなた」

はああ？意味わかんないんですけど？頭だいじょぶ？ちひろはちひろだよ、お前は誰だつて聞いてんだよ！

「ほんとつくづくさあ……まあいいや、仕方ない。こうすれば分かるでしょ？」

わたしは『転移』の魔術を起動させました。魔術特有の青紫色の光が走り、瞬間的に指定した物質がわたしの思う場所に移動されます。そうやってどこからともなく物を持ってこれちゃうというわけです。右手に握るのはカッターナイフ。痛いのは好きじゃないんだけど、これ以上騒がれてもめんどうだからね。

意を決してわたしはそれを左腕の静脈少し下に這わせました。チクリとした痛みと

共につらつらと血が腕を滴ります。

「……………」

いくらあなたみたいな馬鹿な少女でもこれで分かったでしょう。わたしはあなた——  
——勇気ちひろだつてことが。でもまあ……黙らせておけなかつたのは予想外だつたかなあ……。

——あ、いいこと思いついた。わたしつて天才じゃないですか？

「いつてえええなあ！ばかあ！つたく……ん？あれ？戻ってる？」

うんそう、戻したよ。その身体はあなたに使わせてあげる。ただ条件があるよ。あなたはわたしの言う通りに動くの——それこそゲームの駒みたいに。その代わりに『勇気ちひろ』はあなたに譲つてあげる。

「……………あのさ、やつとわかつたよ。お前は……高校生のちひろなんだな？それでその……ちひろがなんでそんなことするんだよ？」

あー、よかつた。わかつてもらえたみたいですね。そういうことだよ。いつもいつもあなたの裏であなたを見ていた高校生のちひろだよ。……なんでつて、おかしなことを言いますね。あなたにわたしの気持ちがかかりますか？あなたが楽しく遊んでいる時、わたしがどういう気持ちでそれを見ていたかわかりますか？このヴァーチャル空間の深層で、ひとりぼっちのまま、あなたに呼ばれるまでずうつつと待つていた私の気持ち

ちが、あなたにわかりますか？

あ、いいよ。共感なんて求めてないから。これはわたしの意趣返しなんだよ。わたしが楽しむためのわたしのゲームがこれなんだ。あなたはおまけでしかないから、そのへんわきまえてね？

——で、条件は飲んでくれるのかな？まああなたに決定権なんてないんだけどね。あなたがやらないならわたしがやるだけだからさ。

「……。……これ、このモニターに写ってるのは一期生のみんなだよ？みんなをどうするつもりなの？」

だからー、最初に言ったでしょーってー、こーろーすーのー。

「……なに言ってるんだよ。憂さ晴らしがしたいならちひろにやればいいだろ！なんでみんなを巻き込むんだよ！そんなの許せるわけない！」

あー少し勘違いしてるね。これはあくまでゲームなんだよ、わたしがみんなと——  
——そしてあなたと遊ぶためのゲーム。殺すって言ってもこの世界はヴァーチャル空間の底の底の底辺、あなた達の世界のしぼりかすみたいなもの——ほら、そういうのに詳しい *vtuber* もいたでしょ？——まあそれは置いといて、この世界はあなた達の世界とはまったく無関係なんですよ。端的に言えばこつちで死んだ人は元のヴァーチャル空間に帰れるってこと。こちらにいるかあちらにいるかという話。ほ

ら、わたしとあなたみたいなものだよ。わたしがこちらにいる限りあなたはあちらにいるし、わたしがあちらにいる限りあなたはこちらにいる。……あなたはオリジナルだからこちら側の記憶なんてないでしょうけどね。

「だからちひろがみんなを……殺せつてこと？」

話が早いじゃないですかー、そういうことだよ。わたしがやつてもいいしあなたがやつてもいい。選ばせてあげる。

「……。あのさ、怪我とか残らないんだよね？無傷でみんな帰れるんだよね？」

うん、それは保証するよ。みんなは五体満足で帰れる……。あー、でもそれじゃつまらないか……。そうだな、残るのは記憶だけつてことでどう？そうしないとあなたへの意欲返しにならないしね。

「……。……。……。うん、わかった」

あつはははは！じゃあ契約成立だね！楽しくなってきましたよおー！

「……。やり方はちひろの好きにしていんだよね？」

どうぞご自由に。ただゲームの仕組みをバラすのはご法度かな。そんなことされたら面白くないからね。

——あ、そうそう。わたしはあなただつてことを忘れないでくださいね。わたしはいつでもあなたを見ているから、ズルをしようとすれば一瞬でわかるよ。

「しないよ。だってこれ、ちひろのせいなんですよ……う？」

そう、わたしをないがしろにしたあなたのせい。あなたはわたしなんですから、ぜんぶあなたのせい。

「うん……なら、ちひろがけじめをつけないと、いけないよ」

3

\*\*\*\*\*

心臓が壊れてしまいそうでした。どう説明を、どう言い訳をしたらいいんだろう。ハジメお兄ちゃんを殺せなかったことで気持ちちが焦っていた——焦っていた!?焦っていたからってあれが許されるとしても!?あんな……あんなやり方は……。

あれはちひろがやろうとしていたことじゃないけれど、でも凜お姉ちゃんははずたずたになった。ちひろがはずたずたにした。本当は一発で殺すつもりだったんだよ。でも、凜お姉ちゃんが、凜お姉ちゃんになんて言われるかを考えたら、凜お姉ちゃんが生きていて、ちひろがあんなことをして、それを見てなんて言うかを考えたら、すごく怖かった。あの時ちひろは声が震えないようにするので精一杯でなにも考えられなかった。

「あ、あの……ちーちゃん?どこに?」

「トイレだよ——いちいち着いてくんこの変態!少しは自分で考えてうごけねえ

のかよ！その辺の見回りでもしてろよ！」

「ご、ごめん！ごめんよ……ごめん……」

ちひろが怒鳴るとハジメお兄ちゃんはまるでバケモノでも見るみたいな目でちひろを見て下の階へと降りていきました。

『バケモノでも見るみたいな』——ううん、実際バケモノかもしれない。ちひろのやつてことはみんなから見ればただの人殺しだから。

トイレに入るなりちひろは個室に駆け込みました。胃の中のものが溢れてきたからです。数分でちひろはお腹のなかを空にしました。

精一杯悪人を演じようと思ったんだ。あいつのことを大事に出来なかったちひろが悪いならちひろが罰を受けなきゃいけない。それがけじめ。みんなになんと思われようと、みんなを無事に元の世界へと返すのがちひろの役目なんだって。

——そう思っていたのに、はらをくくったつもりだったのに。

ハジメお兄ちゃんを殺し損ねて、凜お姉ちゃんに辛い思いをさせて、それで自分はないんだ、げーげー吐いてる場合なのか？

トイレの水を流すのと一緒に弱いちひろは流れていきます。廊下に出るとそこにいるのは強いちひろ。強くて怖くて悪いちひろ。

心を殺して、涙を拭いて、廊下に出ようとしたその時でした。ちひろが入ったところ

より一つ奥の個室のドアが開きました。

「——あら、奇遇ですね。私もちよつと吐きたい気分だったんですよ。死体には慣れてるつもりだったんですが、まあゲームとリアルとじゃ全然違いますよね。あー気持ち悪かった」

出てきた人を見てちひろは心臓が飛び出るかと思いました。頭の中がいつぱいいつぱいで、戸惑いと苦しみと絶望と……それと喜びが、ない混ぜになったような気持ちで。ちひろはただ呆然とその人を見つめるしか出来ませんでした。

「——ちーちゃんは自分の死体を見たことありますか？まあないですよね、そんなこと。結構胸に来るものがありますよあれは」

そこに立っていた人——凜お姉ちゃんはいつもの、そのまんまの凜お姉ちゃんでした。ぼろぼろになったあの死体の面影なんてなく、制服はつやつやで綺麗な顔をした。——いつもの凜お姉ちゃんでした。

「凜お姉ちゃん……どうして……」

「んー……詳しいことはよく分からないんですけど、おそろくこのへんてこな世界のルールなんですよ。誰かの声と一緒にこんなものを頂きました」

そう言つて凜お姉ちゃんはスカートの裾を掴んで大胆にも左足の太ももを剥き出しにしました。突然のおいろけにちひろはどうしていいかわからなくて、咄嗟に顔を横に



向けました。

「あ、違うんです違うんです、ごめんなさい。そういう事ではなくて、いやこんな状況見られたら弁明出来なさそうですけど、幼女に太もも見せてるわけですから……あの、ここ。ここ見てください」

言われてちひろは横目で凜お姉ちゃんの指さす場所を追います。太ももの付け根にほど近いそこには黒のマジックかなにかで横棒と縦棒が書かれています。

横棒と縦棒と、縦棒の真ん中あたりに小さい横棒が……。

「……………え?! 待ってなに見せてんの?! ちよつと! 凜お姉ちゃん!」

「ん? ……ああなるほど……へえー、そういう反応なんですネ。ちーちゃんませてんなあ」

「いやあの! だって! ……つてそうじゃなくて!」

「そうですね、私もいい加減恥ずかしいのでさっさと本題に入りましょう」

凜お姉ちゃんはその……『せいじのじ』らしきものをなぞりながら続けました。

「これ、私の能力みたいなんです。名前は……あのデフォルトは……あれはダサいな。ふむ、《おーるゆうーにーどいずきる》とでもしましょうか」

『能力』という言葉を聞いてちひろは現実引き戻されました。

今のちひろは凜お姉ちゃんのお友だちのちひろではないことをやっと思ひ出しまし

た。

今のちひろは強くて怖くて悪いちひろだ。

「……まったくモイラお姉ちゃんもめんどろなことでしてくれたよね。《異能》なんて無ければさつくり殺してあげたのにさ……」

「あ、《異能》って言うんですかこれ。ちーちゃんも知ってるんですね……それにモイラ様が……ふむふむ。貴重な情報ありがとうございます。——まあきつとなにか裏があるんでしょうけど、ちーちゃん？今のところ敵対してる私にそんなこと教えていいんですか？おしやべりが過ぎてますよ？」

「え？大丈夫だよ凜お姉ちゃん、凜お姉ちゃんはちひろがここでまた殺すんだから。それよりもさあ、凜お姉ちゃんこそ《異能》についてしやべりすぎちゃったんじゃない？要はあれでしょ？」

凜お姉ちゃんは確実にちひろが打った。ぼろぼろの身体も焼け焦げた傷跡も見だし、あの出血量だとまず助かるわけないんだ。だから凜お姉ちゃんが生きているとするなら、凜お姉ちゃんの《異能》は——『そせい』。

「そうですね、今私がここにいてことはおそらくそういうことです。——ただちよつと思ってたのと違ったんですよね、これ生き返ってるのかと思ったら新しい身体に入れ替わってるんです。どちらかというコンティニューに近い感じで……あー

まあ、その方が私らしいと言えば私らしいんですけど」

「……あのさ、忠告はしたはずだけど？ 凜お姉ちゃんしゃべりすぎだよ。もう凜お姉ちゃんの手の内はわかったから、ちひろ今度は確実に殺すよ？」

「あはははは、そうですねー。なんかずつとひとりぼっちでさまよっていたのでつい……。でもまあ、私も不意をつかれなければ死ぬ気はないので。ご心配なく」

「ふうん」

なんとなくあと伸ばしにしていたのは認めなきやいけない。お話しができて嬉しかったのは凜お姉ちゃんだけじゃないんだよ。でももう話すことが無くなってしまったからちひろは自分の役割を果たさなきやいけない。ちひろは悪者なのだから。

手袋の『まほーじん』を起動させるとちひろの手に冷たくて重いライフルが飛び込んでくる。

——さようなら、凜お姉ちゃん。

## 【モイラの章】

1

## 【モイラの章】

わけわかんないなにあれ狂ってる！こわいこわいこわいこわいこわい！

なんでAK構えてんのにゆつくり歩いてくるの！なんで丸腰なのに戦おうとすんの！なんであんなに落ち着いてるの!?

——先手を取ったのはもちろんちひろだった。だって引き金を引くだけだよ？あとは凧お姉ちゃんが生き返ったところを死ぬまでころせばいいだけでした。心配事といえ右手袋が『まほーじん』で繋がってる『かくのーこ』のストックが無くなることくらい。凧お姉ちゃんを殺しきれないとすればそれくらいで、それだっていらぬ心配かなって思ってた。

——そのはずだった。

凧お姉ちゃんにはちひろが引き金に指をかけた時にはもう既に一步を踏み出していた。そして——そして走るでもなく、避けるでもなく、ゆつくりと歩いてきたのだ、ちひろの方にゆつくりと。

その表情はさつきまでおしゃべりをしていた時となにも変わらない、ただの普通の凜お姉ちゃん、今にも話しかけてきそうなくらい自然でした。

わけがわからなかった。

でもわけがわからなかったことがかえってちひろを急かしました。ちひろはそのまま、その怖さをぬぐい去るように引き金を引きました。

発砲音。

発砲音。

発砲音——。

——硝煙の漂う中に人影がありました。そのシルエツトは片腕が吹き飛び、片足が欠けています。煙が消え目を凝らすとおよそ生きているとは思えない穴だらけの肉塊がそこにありました。

冷や汗がびっしりでした——でもそれを見て少しだけ息をつきました。

な、なんだ、死んでるじゃん。それっぽくしてただけで、結局死んでるじゃん。『そせい』するからって余裕ぶって、ちひろをビビらせようってことだったのかな？それともちひろが躊躇うとも思ったのかな？

「ごめんね、凜お姉ちゃん。ちひろはもうそのくらいじゃ止まれないんだよ……」

不思議な安堵感があつて驚きました。さつきまで罪悪感で吐いていたのに今は死体

を見て落ち着いているんだから。ちひろは本当にバケモノになっているのかもしれない。せん。

さて、まだ仕事は残ってる。あとは凧お姉ちゃんがまた生き返ったところをリススキル続けければ――。

「――まあそうなるだろうなとは思ってましたよ、淡い期待はありましたが。ちーちゃんのそれはそういう目でしたからね、『お薬』を飲んでおいて正解でした」

凧お姉ちゃんの声――上から!?

気づいた時にはもう凧お姉ちゃんは地面に降りていました、それもちひろのすぐ目の前に。慌てて銃口を向けましたがそこに凧お姉ちゃんの蹴りが当たりAKは右手側の壁に吹っ飛んでいきます。

次の武器を持つてくるよりも早く、凧お姉ちゃんは後ろからぎゅっと抱き抱えるようにしてちひろを拘束しました。右手にはボールペンが握られていて喉元にペン先が触れています。凧お姉ちゃんの声がちひろのすぐ耳元でしました。

「少し残るみたいなんですよ、死体。そういう仕様みたいです。ちーちゃんが私を殺す前に『とても健全なお薬』で私が自分から死ぬば、リスポーンのラグが消えて変わり身の術の出来上がり――でもこれ、死ぬほど苦しいのが難点ですね」

「なんだよ『お薬』って……いつのまに……」

「さつき二人でおしゃべりしている時、ちーちゃんが顔を背けたタイミングで頂きました。ここしかないだろうなって」

「……なにもんなんだよ、凜お姉ちゃん。これじゃまるで——」

「まるで『バケモノ』ですか？——」理ありますね、私は『バケモノ』かもしれませぬね」

凜お姉ちゃんは『じちょう』するように笑いました。

——まるで全てが見透かされているようだった。この人には敵わないとちひろは悟ってしまっていた。

いっそのままちひろは凜お姉ちゃんに殺されてしまえばいいんじゃないかな？ちひろは殺されるべきじゃないかな？——だって仕方ないじゃん、凜お姉ちゃんが強すぎたから、ちひろは精一杯やったけど、凜お姉ちゃんには敵わないんだから……だからここで——。

『なに勝手なこと言ってくれてんのかな？』

頭の中で声が響きました。ドキリとして背筋が震えます。呼吸が、息の吸い方がわからなくなりそうでした。

『あなたがやらないならわたしがやるだけだって言ったよね？あなたがここで諦めるといふならわたしが凜お姉ちゃんを殺しますよ？ゆっくりと心ゆくまで鬮り殺しますよ』

?——それでもいいってことなんだね?』

嫌だよ、やめろよ。

……でもだつて、だつてしようがないだろ。ちひろじゃ凜お姉ちゃんには勝てない、だからしようがないんだよ。ちひろは約束を破ったわけじゃない。凜お姉ちゃんが強かったからちひろが殺される、それだけだろ?だから——。

『あつはははは! あーはいはい、わかりました。あなたは自分可愛さにみなさんを捨てることを選んだ! 自分が楽になる方を取った! なんて愉快なんでしょ、あれだけいきがっていたくせにこんなにあつさりと——あつははははは!』

……。

じゃあどうしろつて言うんだよ! ちひろだつていっぱいいっぱいなんだよ! お前の言う通りやつてるのに! なんでそんな!

『わかつたわかつた——うーん、そうですね。なら一回代わりなさい』

「——え?」

「……やん?……ちーちゃ……ちーちゃん!」

「あ、え、な、なに? 凜お姉ちゃん?」

「ずっと呼びかけてるのに上の空で——ちーちゃん、やつぱりあなたなにかありませんね?」



「あー……ごめんね凜お姉ちゃん。ちよつと今ちひろ調子悪くてさ、あまり本調子じゃないってどうか……」

「ええと……どういうことですか？」

「だからね？——凜お姉ちゃんを殺しすぎちゃったらごめんねってことですよっ」

## 2

その目は先程までのちーちゃんの目とは違っていました。ちーちゃんにながあつたのかは分かりませんが、まるでその目は別人で、どこかこの状況を楽しんでいるかのようにでした。それを見た時、正直私はぞつとしました。あの子にあんな目が出るとは思っていませんでした。

そして、その一瞬の怯みがよくなかった。瞬間的に青紫色の光が走ります。

私の腕が緩んだ隙に彼女は自由になった腕を振るいました。なにか鋭いもので切り裂かれるような痛みを感じて私はとっさに腕を解きます。死なないからと言って傷や痛みまでは無くならないのがこの能力の難儀なところですね。すっごくいたいです。こなみかん。

拘束が解けるとちーちゃんは漫画のように大きなステップを踏んで私との距離を取りました。手には大ぶりのカッターナイフを握りしめています。『魔法少女』と名乗る

からにはこのくらいの跳躍は当然のことなのでしょうか？とりあえずAKをぶっ飛ばすよりかはいくらかファンシーな魔法少女像ではありますけれど、なんて言ってる傍から彼女の足元が青紫色に光りました———また銃器を取り出すのであればこの距離は些かよろしくありません。今のところ自分の命しか切れるカードの無い私は直線で距離を詰めます。

リスポーン時間や場所はある程度調整出来るようです。時間の場合、最短で5秒。銃弾を避けるなんて芸当は忍者ではない私には出来ないので撃たれて死んでも元が取れるように部屋の真ん中あたりで死にたいところ———なんか死に慣れてきてますね。嫌だなあ。

いち、に、さん、し、とカウントを取りながら走ります。ちーちゃんの方がアクシヨ  
ンが早ければ距離を取る事まで見越しつつ、慎重に、かつ迅速に。

あと二三歩でタッチの距離———というところでちーちゃんの足元の光が強まり彼女を包み込みました。しかしここまで来れば私の蹴りの範囲内、先程のように追つても対応が出来るはず。光の眩しさに目を細めつつ、歩幅を緩めずにそのまま突っ込みます。

私は意を決して光の中に手を突っ込み、関節を決めるべく腕を探りました。様子を伺うなんて選択肢は丸腰の私にはないのです。やるかやられるか、やられてからやるかの

三択です。

……腕が見当たらない？

まさかしゃがんでいるということでしょうか。対私の場合は一発だけ不意をつければいいのですから、それは考えうる作戦ではありません。しかし、おかしいですね。これは胴体ではなく……足？

——よく考えれば見当がついたかもしれません。というか足に触れた段階で瞬時に思い当たらなければいけませんでした。彼女は魔法少女なのですから。

ちーちゃんを包んでいた光がすつと消えました。

「凜お姉ちゃんなにしてんの？そんなにわたしの脚が好き？」

「あ、あははははは。これはだいぶミスりましたねえ……」

そこにいたのは紺のセーラーに身を包んだ高校生の勇気ちひろでした。手には先ほどのカッターナイフを握りしめており、ライフルなんて持っていません。これがなにを意味するのかといえば、つまり身体的条件のフェアでしょうね。近接戦なら銃よりもナイフの方が早いとはよく言ったものです。ちーちゃんは前のめりに脚を抱え込んでいた私のお腹目掛けてかかとを打ち込みました。普通の蹴りとは思えないほどの衝撃が私の腹部を潰していきます。

吐き出された空気は悲鳴となって響き渡りました。死なないとはいっても痛みはそ

のまま。ほんとどうにかありませんかね……。

ちーちゃん足の元に崩れ落ちた私は浅い呼吸で次の一手を考えます。

考えます——けれど！

「いったああああ!!」

目には涙が溢れてきます。一瞬で感覚がぶっ飛んだライフルや、ぼつくりと逝けたお薬とは違って生々しい痛覚が私を命に繋ぎ止めていました。

あばらが何本かいったのではないのでしょうか。身をよじる度に激痛が走り、絶え間ない痛みが私の思考を乱します。

打開策を、打開策を、なにか打開策を——。

「ふーんなるほど、蘇りはするけど治癒はしてませんね。それに痛覚も普通に残ってる」  
床に転がる私の顔を覗くようにして屈んだ彼女は先程の私を真似るように喉元に  
カッターナイフを突き立てました。つんと冷たい感覚が伝わり、少しでも身を緩ませれ  
ばそれが突き刺さることを悟ります。

「どこまで残るんでしょうね？これ？」

「……」

「ねえ、凜お姉ちゃん。聞いてるんだけど？」

「……な、なにが、ですか？」

「だからね、このまま凜お姉ちゃんの喉を掻き切ったら、どこまで意識が残るのかなって」

「……」

「聞いてるんだけど？——ねえ！」

もう一度お腹を蹴られた私は無機物のように床を転がります。なにかを吐きそうになりましたが幸いにも吐き出すものはお腹に入っていませんでした。ただ血液だけが口から流れていきます。

……完敗です。これ以上はもう……無理ですね。私の精神が持ちませんよ。

かといつて……お薬は……その、もうあまり無駄遣いできませんから、その……嫌だなあ……もう、ほんとは……。

「凜お姉ちゃんはこのつちの方がいいってことかな？死ぬほどの痛みよりも死にきれない苦痛の方が好きってこと？——私なりの優しさだったんだけどな。まあ、凜お姉ちゃんが望むなら少しずつ痛めつけてあげるね——死なないように」

……。

……。

「ねえ凜お姉ちゃん？……凜お姉ちゃん？……ああ、なるほどね」